人・ひとめぐり

農村体験 国内外でニーズ

大田原ツーリズム社長 藤井（ふじい） 大介（だいすけ）さん（49）＝栃木県大田原市

農家に宿泊し、農業体験や、地域の自然、文化に触れてもらうグリーンツーリズム。第三セクター「大田原ツーリズム」は、栃木県大田原市を中心に約180軒の農家の協力を得て、国内外の小中学校、高校を対象にした教育旅行などを企画する。藤井大介さん(49)はその社長を務める。12月には、台湾の四つの高校から計約140人が来て、大田原市の農家に泊まって異文化体験を楽しんだ。

「『農家民泊』で、田舎の暮らしや、その文化に触れることは、都会の子どもたちにとってとても新鮮。異文化の地域との交流は、外国からのニーズもある。そして我々は地域づくりの会社です。受け入れ側の農家や地域が豊かになることが何よりの目的です」と話す。

藤井さんはさいたま市出身。もとはメーカーの技術者だった。地域づくりに関わりたいという思いで、宇都宮市で農業支援の企業を立ち上げ、今はレストランや総菜の製造販売も手がける。大田原市から「交流人口を増やしたい」という相談を受けて2012年、大田原市などの出資で大田原ツーリズムができた。観光庁に認定された観光地域づくり法人（DMO）でもある。一方の会社も経営しながら、ゼロから宿泊できる農家を開拓してきた。

教育目的の団体旅行に加え、国内外の個人客を狙う方向にも踏み出した。その一つが19年に栃木県那珂川町で開業したホテル「飯塚邸」の運営だ。明治期の古民家や蔵は国登録有形文化財。町が所有するが、内装をモダンに改めて宿泊特化型のホテルにした。食事は街のレストランや和食店を利用してもらう。

「街と一体型のホテルとして考えた。お客様が街を回遊して楽しみ、ホテルと街も潤う。大きなリゾートホテルに閉じこもる旅行では味わえない体験ができます」と藤井さん。11月末に3泊した米国からの2人組み客は、近くの馬頭温泉につかり、そば打ちや箸づくりを体験した。

那珂川町は特別な観光地ではない。交通の便もよいとは言いがたい。それでも、「何もないと思われている農村や地域が観光地になる。文化の体験には、国内でも海外でも大きなニーズがあると実感しています」。

ホテルの23年度の延べ宿泊者数の3割、約450人が海外からだった。旅行業者へのプロモーションやSNS、口コミでじわりと知名度がアップしてきた。

ホテル飯塚邸は会社のフラッグシップ。ここのノウハウもいかして、昨年春からは「農家ホテル」の開業に乗り出した。旅行客を受け入れてきた農家のうち、意欲的な農家が自宅の離れや蔵を、プライベート空間が保てる「ホテル」に改修して経営する。改修には国からの補助金も利用できる。農業を営む傍らで、宿泊客をもてなす。

大田原市と同県那須町に計6軒できた。今年度中にもう1軒増える予定だ。藤井さんは「新しい旅行の市場ができるだけではない。おいしいものを味わい、優れた文化を知ってもらうことで地域のブランド向上も期待できる。そこに住む人たちも地域のよさを再認識できる」と言う。

コロナ禍を経て客が戻ってきた。23年度は大田原ツーリズムが手がけた旅行の延べ宿泊者数は9376人で過去最多だった。

ただ心配もある。「農村地域の人口減少は思ったよりも進んでいる。このままだと、旅行の受け皿でもある地域の活力がそがれてしまう」

（海東英雄）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。